

# 移民と戦争 - ハワイ・ブラジル編 -



働いて成功することを目指し、〈移民〉として海外へ渡った人たちが大勢います。戦前に渡った人たちにとって、第二次世界大戦中の太平洋戦争や沖縄戦は、強制的に帰郷させられたり、移民先と故郷との板挟みになるなど、きびしく暗い経験となりました。今回は、昭和元年(1926)までの八重瀬町民の移民先として多かったハワイとブラジルで、戦時中に移民がおかれた状況についてとりあげます。※当時の東風平村・具志頭村とはせず、「八重瀬町」としました。

## 年表 移民と戦争 — ハワイ・ブラジル編

- 1899 沖縄からハワイへ渡航開始
- 1905 八重瀬町からハワイへ渡航開始
- 1908 沖縄からブラジルへ到着
- 1912 八重瀬町からブラジルへ渡航開始
- 1939 第二次世界大戦開戦  
〈ナチスのポーランド侵攻〉
- 1941 太平洋戦争開戦  
〈日本のアメリカ真珠湾攻撃〉
- 1942 ブラジル:日本との国交断絶  
〈日本語や新聞・雑誌発行・集会の禁止〉  
ハワイ:アメリカ大統領令9055号  
〈日系人の財産没収・強制収容〉
- 1943 ブラジル:サントス沿岸地域強制退去命令  
〈県人500家族が別地域へ退去〉
- 1945 沖縄戦開戦  
ブラジル:「在マウア沖縄県下戦禍被害地復興助成会」結成
- 沖縄戦終戦  
〈太平洋戦争・第二次世界大戦終戦〉  
ハワイ:「沖縄衣類救済運動委員会」結成
- 1947 ハワイ:(財法)「沖縄救済更生会」設立  
ブラジル:「沖縄救援連盟」結成
- 1948 ハワイ:豚500頭を沖縄へ  
〈東風平村10頭/具志頭村7頭〉

八重瀬町出身者からも届けられました！  
**教育復興を支えた移民社会**  
東風平小・中や新城小、具志頭中の校舎や設備・備品への寄付金も多かったです。

昨年度は、ウチナンチュ大会で帰郷した方や、南洋やフィリピン、ポリビア、ブラジルの移民体験者にお話を聞かせていただきました。資料の提供や調査にご協力いただいた皆様、ありがとうございます。これからも、聞き取りや資料の収集を行っていきます。今後ともご協力、よろしくお祈りします。

## Hawaii ハワイ(アメリカ)

八重瀬町から1905年-1926年に553名が渡航しました。1941年に日本がアメリカの真珠湾を攻撃した後、日系人は土地や財産を没収され、強制的に収容所へ移動させられました。その中で、〈アメリカ人〉として差別されない生活や権利獲得のために、アメリカで生まれ育った2世の多くが志願兵となりました。彼らはヨーロッパ戦線の最前線や沖縄へと送られ、その多くが戦死しました。現在、アメリカ史上最多の勲章をもらった部隊として知られています。沖縄戦では、住民に投降を呼びかけ続け、収容所にいる軍人や軍属(少年兵や女学生)への尋問などを行っていました。また、ハワイから救援物資として衣類や豚が送られたこともよく知られています。

## Brasil ブラジル

八重瀬町から1912年-1926年に187名が渡航しました。ブラジルでは、日本との国交を断絶したことから、日本語の使用や日系新聞・雑誌の発行、集会などが禁止されました。また、生活していた日本人街から24時間以内の強制退去や財産の没収など、多くの差別を受けることになりました。そういう中で、米軍の沖縄侵攻の情報を聞いたマウア市の県系人は、沖縄戦中に支援の動きを始めました。終戦後、日本が勝ったと信じた〈勝ち組〉と負けを認めていた〈負け組〉との争いがありました。この争いは、日系社会を1950年代まで分断し、死亡者を出す事件にまで発展しました。1953年から呼び寄せなどの渡航が再開し、大勢が渡りました。

戦争で日本が負け、沖縄戦の被害の大きさなどから、移民先に残る決断をした人たちが数多くいました。移民先の生活も大変な中、家族や親戚たちの無事を祈り、故郷救援のために早い時期から結束していきます。そして、たくさんの衣類などの物資や資金を送ることで、八重瀬町の復興を大きく支えてくれたのです。

# やえせの沖縄戦

平和の礎 刻銘者数(H28現在)

東風平村 具志頭村  
4,748名 2,702名

現在、座談会や個別の聞き取り・現地調査を行っています。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。



今回は聞き取り調査の一部を紹介します。私たちは「戦争体験」に触れる機会を学校・テレビ・新聞・講演会などで得られます。しかし、体験者が一切語るができなくなったら、誰が、どのように伝えることになるのでしょうか。「戦争体験から何を学ぶのか」、改めて考えるきっかけとなれば幸いです。

米軍は読谷・北谷から上陸したが、日本軍側には旧具志頭村港川から上陸するという想定があった。それにより日本軍の陣地や兵舎が置かれ、住民の生活の場と隣り合っていた。「10・10空襲(昭和19年)より前、子どもたち10名ぐらいい、日本兵たちのトラックの荷台に乗って那覇まで遊びにいった」(当時10歳)「ひもじそうな日本兵にこっそり豆腐を届け」(当時9歳)

村と駐屯部隊の関係について、40年以上前の座談会記録がある。米軍上陸が目前となったある日、在郷軍人分会長と一緒にいた役場職員2人は日本兵に足止めされた。

「村長以下ほとんどにスパイ容疑がある、と言われた。しかしその大隊長とは、これまでの信頼関係があったので、その場で誤解は解かれ、そのまま部隊の酒宴に来ないかと誘われた」(年齢不詳)

中部や首里周辺が戦場になっていく頃、村はそれほど危険ではなかった。5月頃、戦況が悪化してからは、壕に避難していたお年寄りや体の大きな子ども、女性たちにも危険な作業をさせるようになった。

「通信隊が近くにいて、やり取りが全部聞こえていた。火薬を詰める弾薬作りもした。斬り込みに行くという学生が水をもらいに来たとき、落ちて止めて止めた」と(当時23歳)

6月頃の南部での体験は、土地勘のない場所であらんとさまよう状況が伺える。「(糸満市)新垣、国吉までずっと逃げていて壕がなかった。石積み木の枝や葉っぱを覆っただけの小屋に隠れた。どこか安全な場所を探そうと外へ出て数分後、親戚家族のいた小屋あたりで迫撃砲が落ちて20名近い人が同時に死んでしまった。それからもう、どうしたらいいか分からず、南へ西へ同じ場所をぐるぐる回っていた。糸満の西側まで行って壕に入っていた。その後、米兵にガス弾を投げ込まれて火傷のようになり、壕の外へ出た」(当時17歳)

「思い出したくないねえ...でも、あんな体験を誰にもさせたくないからね。だから話すよ」

調査の際、話者の「家族や地域の皆様、関係機関等にも大変お世話になっております。ありがとうございます。引き続きご協力をよろしくお願い致します。」